

高校日本史で女性の歴史をどのように教えるか？
— 近現代史学習のなかで —

河 西 秀 哉

**How Do I Teach Women History in Japanese High Schools?:
The Study of Modern History**

KAWANISHI Hideya

神戸学院大学 文学部 総合文化学科 准教授

連絡先：河西秀哉 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸学院大学文学部総合文化学科
kawanishi@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

This paper considers how history relating to women is taught in Japanese high schools. Based on my examination of eight textbooks that were created in line with the newly revised (March 2009) curriculum guidelines, I show how women's issues are covered. In particular, this paper focuses on modern history.

Compared to the textbook of Japanese History B, the Japanese history A textbook covers a variety of women. The way women are covered also differs for each textbook.

In teaching practice, I set as a theme the consideration of employment and family problems during the High Economic Growth Period. In this way, it is possible to see history from both the male and female points of view. I also discuss history, which makes students think about living in the present, by covering the diverse forms that various sexualities may take.

Keywords: high school, Japanese history, modern history, women, gender

要 旨

本稿は、高校の日本史の授業で、女性に関する歴史がどのように教えられているのかを検討するものである。2009年3月に改訂された新しい「学習指導要領」に基づいて作成された日本史 A の教科書 2 冊を検討し、その中で女性の問題がどのように取り上げられているのかを明らかにした。本稿では特に、近現代史をその検討対象としている。

日本史 B の教科書に比べて、日本史 A のそれは多様な女性を取り上げている。また、取り上げられ方も、それぞれの教科書によって特徴がある。

授業実践では、高度経済成長期の雇用や家族の問題を考えるテーマを設定した。これによって、男性と女性両方の視点から歴史を見ることができるだろう。最後に、多様な性の、多様なあり方を取り上げることで、今を生きることを生徒に考えさせる歴史のあり方についても論じた。

キーワード：高等学校、日本史、近現代史、女性、ジェンダー

はじめに

本稿は、高等学校の日本史の授業で女性に関する歴史がどのように教えられているのかを検討し、その上で生徒たちにこうした問題をどのように教えるのかについて、具体的な授業実践の提起を目的としている。

前稿「高校日本史では「女性」をいかに教えているのか？—近現代史学習のなかで—」（『神戸女学院大学論集』第61巻第2号、2014年）のなかで私は、高等学校日本史Bの教科書に叙述されている女性像について検討した。その検討の結果、教科書のなかが登場する女性は男性に比べて数は少なく、特定の人物に集中して取り上げられている傾向を明らかにした。また、女性の人物や女性に関係する事項が取り上げられたとしても、記述に曖昧な部分も多く、「点描」とどまっている点を指摘した。つまり、女性の歴史はエピソードとして紹介され、近現代史を通じての女性の歩みが通史的に生徒に理解されるような教科書叙述にはなっていないのである。こうした現状を踏まえ、授業時間が限られているなかで、女性史やジェンダー史に関する歴史研究の研究成果を教科書叙述に活かしていく工夫を提起した。

また、横山百合子の整理¹に学びながら、①「男女共同参画」が叫ばれつつも性別分業意識が根強い現在の日本社会はいかに形成されてきたのか、というような現代の問題を見つめ、未来を構想するために性別の視点を踏まえる必要があること、②自己の生活の身近な単位である家族を生徒に意識させるため、女性の視点を組み込む必要があること、③生徒が一つの時代を男性の観点だけではなく、様々な角度からとらえ、その連関を見つけるためにやはり女性の視点を学ぶ必要があること、以上の三点が女性の歴史をこれまで以上に学び、男女両方の視点から見た歴史教育の必要性となることを論じた。

本稿は前稿が課題として残した点について、さらに詳細に論じる。課題の第一は、日本史Aの教科書記述の検討である。前稿で検討した日本史Bとは、古代から近現代まで全体を通史的に教える科目である（4単位）。それに対して日本史Aは、近現代史に特化した形で教えられる2単位の科目である。大

学受験で利用されて多くの高校生が学ぶ日本史 B の教科書よりも、日本史 A の教科書は近現代史に特化している分、日本史 B よりも記述がそれぞれの教科書ごとにバラエティーに富んでいて、かなりユニークな記述で書かれている教科書も目立つ²。本稿はそのうち、2009年3月に改訂された新しい「学習指導要領」に基づいて作成された日本史 A の教科書のうち、最もシェアの高い『高等学校日本史 A』（第一学習社）と、その新しい「学習指導要領」後に新たに登場した『新日本史 A』（実教出版社）の2冊を取り上げたい³。日本史 A のなかで最も使用されている第一学習社の教科書と、歴史学の新しい成果を踏まえて登場した実教出版社のそれとを比較することによって、それぞれの特徴のみならず日本史 A の教科書記述の像も明らかになると考える。

課題の第二は、前稿や課題の第一の検討を踏まえ、では具体的に高等学校の日本史の授業で女性の視点を踏まえた歴史をどのように生徒に教えたらよいか、その具体的な授業実践を提起することにある。本稿では特に敗戦後の家族と女性に焦点を当て、それに関する授業教案を提示したい。このささやかな提起によって、これまで以上の高等学校日本史の近現代史学習がより豊かなものになることを期待する。

1 女性はどうのように登場するのか

まず、現在の教科書がどの程度女性を登場させているのか、日本史 A の教科書2冊（第一『高等学校日本史 A』と実教『新日本史 A』）を確認しておきたい。それが次に掲げた表である。本文に取り上げられているだけではなく、注や図表などにその名前が記載されている人物もピックアップした。

ここでは、全部で40人の女性がこの2つの教科書で取り上げられている。前稿で述べたように、日本史 B すべての教科書（近現代史の部分のみ）で登場した女性は31人であったので、それよりも多いことがわかる。おそらく、すべての日本史 A の教科書を取り上げれば、もっと人数は増えるだろう。つまり、日本史 A の方が同じ近現代史を叙述しつつも、女性を多く取り上げていることがわかる。索引に記されている人物名は、例えば実教『新日本史 A』は183

表 高等学校日本史Aの教科書の中の女性

	『高等学校日本史A』 (第一学習社)	『新日本史A』 (実教出版社)	備考
1			
2		石牟礼道子	水俣病を主題とした『苦海浄土』などを執筆
3	市川房枝		
4	伊藤野枝	伊藤野枝	
5	上原ひろみ		1979年生まれのジャズピアニスト
6		大田洋子	被爆体験を『屍の街』として発表
7	緒方貞子		日本人女性初の国連公使、難民高等弁務官
8	カイウラニ王女		ハワイ王国、日本皇族との結婚が模索される
9	和宮	和宮	
10	加藤シヅエ		
11		金子文子	無政府主義者、朝鮮人との親交
12		カルメン・ジョンソン	占領期、地域女性団体の民主化に取り組む
13		川上貞奴	
14		菅野スガ	社会主義者、大逆事件で逮捕
15	樺美智子		1960年の安保闘争時に国会で死去、東大生
16	岸田俊子	岸田俊子	
17		金学順	元従軍慰安婦、自ら名乗り出て証言した
18	庄司紗矢香		1983年生まれのヴァイオリニスト
19	正田美智子		
20		知里幸恵	
21	津田梅子	津田梅子	
22	並木路子		
23	樋口一葉	樋口一葉	
24	平塚らいてう	平塚らいてう	
25	ピンク・レディー		
26	ベアテ・シロタ	ベアテ・シロタ	
27	前畑秀子		
28	松井須磨子		
29		丸岡秀子	戦前・戦後の農村の女性・労働に目を向ける
30	三浦環		
31		関妃	
32	向井千秋		日本人女性初の宇宙飛行士
33	村上佳菜子		1994年生まれのフィギュアスケート選手
34	安井てつ		東京女子大学の学長として女子教育
35	山川菊栄	山川菊栄	
36	山川捨松		
37	柳寛順	柳寛順	
38	与謝野晶子	与謝野晶子	
39	吉岡弥生		医師、1900年東京女医学校を開設
40		李香蘭(山口淑子)	
	28人	22人	

人で、そのうち女性は15人（表の数と一致しないのは、教科書本文には掲載されているものの索引には掲載されていない人物もいるため）である。日本史 A の教科書で、人物が多く取り上げられる理由の一つが、第一『高等学校日本史 A』が「人物クローズアップ」、実教『新日本史 A』が「人物スポットライト」という、それぞれ本文横に人物の写真と短い文章で構成したコラムを掲載することでその時代の特徴を描き出そうとする叙述の工夫をしており、そのために多くの人物が教科書のなかに掲載されたためである。第一『高等学校日本史 A』では津田梅子、山川捨松、前畑秀子、緒方貞子、向井千秋らが「人物クローズアップ」で、実教『新日本史 A』では関妃、金子文子、柳寛順、ベアテ・シロタ、カルメン・ジョンソン、太田洋子、丸岡秀子らが「人物スポットライト」で取り上げられている。これらの人物の生涯を通して、生徒に歴史に興味を持たせるような構成が日本史 A ではなされているのである。

ところで、第一『高等学校日本史 A』は28人、実教『新日本史 A』は22人の女性が登場しているが、両者に共通するのが10人だということも注目される。日本史 B の教科書はどの教科書にも取り上げられる人物、言い換えればやや特定の人物に集中して取り上げられる傾向にあるが、日本史 A のそれは比較的分散している。つまり、教科書それぞれによって記述に特徴を出し、それに見合った女性の人物が登場していると言えるだろう。

例えば、第一『高等学校日本史 A』では、緒方貞子や向井千秋ら存命の人物が「人物クローズアップ」で取り上げられ、その事績が紹介されている。後述するように、日本史 A の教科書の戦後史記述が分厚いため、比較的近年の歴史的な事項についても詳細に記されているため、こうした存命の人物が数多く登場するのである。また、庄司紗矢香や村上佳菜子、上原ひろみのように、生徒にかなり年齢が近い人物を写真付きで登場させているのも、第一『高等学校日本史 A』の特徴である。このようにして、生徒にこの教科の身近さを印象づけているのではないか。また世界で活躍する彼女らを紹介することで、日本史に「世界」という観点を与えようとしている。

一方、実教『新日本史 A』は金子文子や管野スガら社会主義者、石牟礼道

子や丸岡秀子のように庶民の生活・暮らしに寄り添った活動をした人々、日中の境界を生きた李香蘭（山口淑子）や朝鮮人の金学順などが登場している。ここには、マイノリティの視点を活かそうとする意図があるように思われる。近現代の政治社会のなかで中心的に活動してきた男性のみに焦点を当ててきたこれまでの教科書叙述に対し、彼女らを登場させることでそれとは別の、人々に寄り添った歴史像を生徒に提示することに繋がるのではないだろうか。また、民族や境界など、大日本帝国の特徴をより具体的に示すことにも繋がるだろう。このように、日本史 A の各教科書は日本史 B のそれよりもそれぞれの特徴が明確で、登場する女性の人物もバラエティに富んでいるのである。

もちろん、日本史 B のすべての教科書に登場した和宮、平塚らいてう、与謝野晶子は、第一『高等学校日本史 A』と実教『新日本史 A』にも掲載されている。

ただし、市川房枝は実教『新日本史 A』には登場しない。市川は①大正デモクラシー期の女性運動、②アジア・太平洋戦争への協力、③敗戦後の女性の政治への進出などの項目で登場する可能性がある。しかし①については、「1911年に雑誌『青鞥』を発刊した平塚らいてうらは「新しい女」と名のり、自立した女性の生き方を探ります。」（実教『新日本史』55ページ）、「新婦人協会など、女性の立場からの組織……が活動します」（同上70ページ）と、日本史 B の教科書ならば必ずセットで登場する平塚や新婦人協会が記述されていても、市川は登場しない。②③についても記述はあるものの、固有名詞を登場させない論述の仕方、これまでの教科書ならば必ず登場してきた市川の名前を見ることはない。これは、近代女性＝市川房枝に代表させるという図式で教科書の女性像を描かないという姿勢ではないだろうか。

ところで、第一『高等学校日本史 A』と実教『新日本史 A』の両者に共通して登場する人物で、日本史 B の教科書にあまり登場しない人物が2人いる。第一に、柳寛順である。柳は実教『高校日本史 B』のなかでも「朝鮮・アジアでの民族解放運動」というコラムの記述で登場している（実教『高校日本史 B』203ページ）が、日本史 B での登場はこの教科書1冊のみである。日本史 A で

は第一『高等学校日本史 A』も実教『新日本史 A』も取り上げ、しかもその記述は詳細である。朝鮮の三・一独立運動でデモの先頭に立って人々を指揮し、逮捕されて獄中死した彼女を取り上げることで、2社ともに近現代日本の植民地統治のあり方を生徒に問いかけるようとしているのではないか。先述したように、日本史 A の教科書は人物をコラムで取り上げ、生徒の理解を深めるような工夫がなされている。柳の取り上げ方もまさにこうした方法の1つであろう。

第二に、ベアテ・シロタである。実教『新日本史 A』では、彼女はカルメン・ジョンソンとともに取り上げられている (115ページ)。ベアテ・シロタはGHQの憲法草案作成作業に関わって人権条項を担当した人物で、特に女性の権利を掲げて行動した。第一『高等学校日本史 A』では「憲法と女性」という欄を設けて、日本国憲法において男女平等原則が定められた過程を、ベアテ・シロタと市川房枝、山川菊栄らを通して描き出している (141ページ)。このベアテ・シロタは日本史 B では1冊も登場しない人物である。なぜ日本史 A では登場するのだろうか。その理由は、日本史 B に比べて、日本史 A の教科書の方が戦後史記述が充実していることが挙げられる。彼女を取り上げることで、敗戦後の「民主化」において、人権特に女性の権利が向上したこと（それはつまり、戦前の日本社会がそうでなかったこと）を示すとともに、日米が協力してその問題に取り組んだこと⁴をも生徒に理解させる構成を目指しているのではないだろうか。

それぞれの教科書は、人物だけでなく女性の記述も豊富である。第一『高等学校日本史 A』では、「新しい女性」(79ページ)、「近代の女子教育」(87ページ)、「憲法と女性」(141ページ)というコラムをそれぞれ1ページずつ設け、近現代日本の女性の歴史を提示している。また、「制服はいつ頃誕生したのだろうか」という発展的な探究学習を生徒にさせるための特別なコラム (88~89ページ)のなかでは、男性・女性双方の制服の歴史を提示し、学校という生徒たちにとって最も身近な生活環境を通して、近現代社会の政治社会の特質を理解させようとしている。注目したいのは、女性のみならず男性にも焦点を当てるのではな

く、男性と両方叙述することで、それぞれの性から見た近現代日本社会が明らかとなっている点である。前稿で、日本史 B の教科書では女性の歴史はエピソードとして紹介され、通史的に理解されるような叙述がなされていないのではと指摘したが、この第一『高等学校日本史 A』ではそれを克服するような工夫がなされていると言えよう。

実教『新日本史 A』でも、女性の歴史を提示するコラムが数多く提示されているほか、教科書本文記述のなかで通史的に女性の問題を扱おうとしているところに特徴がある。例えば、1920年代の日本社会、特に都市化と市民文化について説明する部分（68～69ページ）は興味深い。モダニズム文化が花開く1920年代の日本社会を特徴を、実教『新日本史 A』は母性保護論争などを展開した女性たち、『婦人公論』や『主婦之友』などを読む女性たち、そして日本のみならず植民地にも登場したモダンガールなどを通して描いている。このように、デモクラシー思想から自らの権利を獲得しようとする動き、大衆社会のなかでマスメディアが発達したこと、東アジアとの連関、そうしたこの時代の諸特徴を女性の動きを通して描き出す工夫は、女性の歴史を単なるエピソードではなく、通史のなかに組み入れて叙述したものと言えるだろう。以上のように、日本史 A の教科書では日本史 B のそれと比べて、エピソードにとどまらず通史的に女性の問題が記述されているのである。

2 どのように教えるのか？

では、以上の考察を踏まえ、具体的にどのように女性の歴史を教えるのか、その授業実践を提起したい。学習指導案は論文末に資料の形で提示した。

これまで繰り返してきたように、女性の歴史を教えるにしても、それがエピソード的な「点描」となってしまっはいけないだろう。それゆえ、通史を学ぶなかで女性の問題や男性の問題双方に触れ考えることができるテーマとして、ここでは高度経済成長期の労働・家族の問題を取り上げた。

高度経済成長に伴って、核家族化がより進行する。また企業は終身雇用制度と年功序列賃金制度を確立し、男性のサラリーマン化が進んでいく。一方で、

女性は結婚や出産を機会に退社して専業主婦となり、子どもが成長した後は家計補助としてパートタイムに働くことになる（いわゆる女性労働力の M 字曲線）。こうした女性の専業主婦化は、配偶者特別控除や高等学校での家庭科の女子必修によってより強固なものとなっていく。

主婦たちは高度経済成長のなかで、そのひずみにも目を向けた。それが様々な社会運動へと向かっていく。これは、女性特有の運動としてある一方で、同時期の様々な社会運動の影響を受けていたことも理解する必要がある。そして当該期には、これとは全く異なるウーマンリブの運動があった。アメリカにおけるリブの動きは日本へも波及したのである。それは、専業主婦化・性別役割分業を批判する動きでもあった。

以上のような動向は、現在にも続く制度や、今なお残る性別役割の考え方が、戦後にむしろ作り出され固定化したことを示すものである。これを学ぶことは、歴史から現在を考えることにも繋がる。そして男性の観点、女性の観点、両者を同時に学ぶことができるテーマでもある。

今回は日本史 A の教科書を利用したが、日本史 B においても高度経済成長に関する記述は多い。また、そのなかで企業型社会が成立したことは叙述されている。このなかで、男女の性別役割分業が強固になったこと、女性の専業主婦化が進行したことなどを説明することができる。つまり、この授業実践は日本史 B にも汎用できるものと考えられる。

今回は高度経済成長期の問題で学習指導案を作成したが、それ以外の時期においても男性と女性のそれぞれの視点から、歴史を学ぶことは可能である。その学習指導案については今後の課題としたい。

おわりに

以上、高等学校日本史 A の教科書叙述の中での女性像について検討し、それを踏まえて具体的な授業の実践案を示した。

日本史 A の教科書記述は、日本史 B のそれに比べて、極めて多様であり豊富である。これは歴史学の成果がうまく反映されたものであるとも言える。ま

た、その内容もできるだけエピソードにとどまらないよう、本文のなかに組み入れようとしているところも評価できる。問題は、それが多くの生徒が履修する日本史Bの教科書ではそのレベルにまで到達していない点である。日本史Aの記述を日本史Bに活かしていくことが今後の課題と言えるだろう。

その意味で、授業実践では日本史Aの教科書を利用しつつも、日本史Bにおいて高度経済成長を説明する時にも利用出来るような案を提示した。このように、高度経済成長の変化によって男女の役割が新たに固定化させられたと示すことで、高度経済成長という通史を学びながら男性・女性どちらも性の通しての歴史を考えることができるのではないか。

繰り返しになるが、女性の歴史を今まで以上に学び、男女の視点から見た歴史教育がなぜ必要なのか。その答えとして、男女・親子・家族関係などと政治経済社会との関わりを学ぶこと、そして生徒が男性の観点だけではなく様々な角度からとらえその連関を見つけることなどが挙げられる。高度経済成長下の家族関係・雇用関係の変化は、こうした視点を養うのに重要な事項だと思われる。そして、歴史が今に繋がることを理解するためにも興味深い論点を提示している。こうした試みから、多様な性の、多様なあり方を取り上げることで、今を生きることを生徒に考えさせる手がかりになればと思う。

【注記】

- 1 横山百合子「教科書にみる女性史と歴史教育」（『歴史地理教育』588号、1998年）。
- 2 久留島典子「高等学校日本史教科書にみるジェンダー」（『学術の動向』2010年5月号）は、「日本史Aの教科書のなかに、たとえば『女工の歴史』・『家族制度と女性』といったテーマで、近代以降の女性について詳述するものがある。」「受験に必要な知識をもち込まなければならないBに比べて、受験を直接意識しないAは、ジェンダーの観点を入れる余地があるようにも推測できる」と記している（68ページ）。
- 3 『高等学校日本史A』（第一学習社、2014年）の執筆者は外園豊基・奥村展夫・高橋昌弘・中山富廣・布川弘・松澤徹・森本光展、『新日本史A』（実教出版、2014年）の執筆者は成田龍一・原田敬一・荒川章二・大串潤児・川島敏郎・豊田文雄・児玉祥一・矢野慎一・中田稔・本杉宏志（その他「協力」として4名）。本稿では、教科書を引用するときは本文中にそのページ数などを入れ込み、第一『高等学校日本

史 A』、実教『新日本史 A』と略記した。なお、日本史 A の教科書は他に、『日本史 A』（東京書籍）、『現代の日本史』（山川出版社）、『日本史 A』（山川出版社）、『高校日本史 A』（実教出版）、『高等学校日本史 A』（清水書院）がある。

- 4 第一『高等学校日本史 A』では、ベアテ・シロタと市川房枝と一緒に写った写真を掲載し、「女性の地位向上のために、二人のはたした役割は大きい。」と述べている（141ページ）。

[付記] 本稿脱稿後に、久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵編『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』（大月書店、2015年）が刊行された。本稿の指摘ともテーマが重なる重要な著書である。併せて参照されたい。

[資料]

地理歴史科（日本史）学習指導案

実施者：河西秀哉

- 1 日時 2015年1月30日（金） 第5限（13:50～14:40）
- 2 学級 3年A組（男18人、女18人、合計36人）
- 3 場所 3年A組教室
- 4 教科・科目 日本史 A
- 5 大項目 第7章 冷戦のなかの経済成長
第1節 高度経済成長下の日本
- 6 小項目 第1時 日韓条約・ヴェトナム戦争と沖縄返還
第2時 経済成長と住民運動
第3時 新たな生活スタイルへ（本時）
- 7 本時の目標
- ・高度経済成長下の中で、終身雇用制度と年功賃金制度が確立し、戦後の「家庭」スタイルが定着したことを理解する。
 - ・それに伴って「専業主婦」が固定化していったことを理解する。
 - ・高度経済成長下における女性の社会運動について理解する。
 - ・高度経済成長後、男女雇用機会均等法の成立によって雇用形態が変化していったことを展望する。
- 8 本時（第3時）の指導過程

過程	学習内容	指導方法・生徒の学習活動	教材・資料	指導上の留意点
確認 5分	前回確認	前時の授業内容を確認する。 ・高度経済成長とは何か？ ・住民運動はどのようなものがあつたか？ を発問し、答えさせる。 ・その後、前時の授業の流れについて大まかに説明する。	教科書 図録	・経済の成長について具体的にイメージさせる。 ・なぜ住民運動が起きたのか、その理由についても考えさせる。
導入 5分	家族について	自分の家族や家族の職業、住居の形態を考えさせる。 ・核家族？大家族？ ・共働き？そうではない？ ・サラリーマン？自営業？ ・団地？マンション？一軒家？ そうした家族の形態や職業がいつ形成されてきたのかを考えさせる。		・自分を取り巻く「今」を気づかせ、考えさせる手がかりとする。

展開 35分	終身雇用と年功序列	1960年代の高度経済成長に伴って、企業では終身雇用制度と年功序列賃金が確立。マイホームと専業主婦化、女性は家事と育児に専念する、新たな性別役割の家族形態。配偶者特別控除や家庭科はこの時期に成立。	団地での掃除の写真 女性の就職に関するグラフ	・日本型雇用形態の成立として紹介する。 ・パートという雇用形態を説明し、女性の家計補助的労働について理解させる。
	女性達の運動	経済成長に伴う社会環境は女性の社会運動にも影響。学童保育設置運動、消費者運動、生協運動など。ウーマンリブの動きが世界的に広がり、日本でも展開。結婚による束縛などに反対。	教科書142～143ページ 当時の新聞	・運動が、家庭の成立を前提としていること、他の住民運動とも運動していくことを説明。 ・戦前からの女性解放運動とも住民運動とも異なることを理解させる。
	家族と労働の変化	高度経済成長による変化。サービス業の拡大と女性労働者の増大。1985年の男女雇用機会均等法の成立に伴う、性別役割分業の問題化。	女性の就職に関するグラフ 教科書146ページ	・未婚率などのグラフも活用し、高度経済成長期との違いに気づかせる。
まとめ 5分	まとめ	冷戦のなかの経済成長について、特に高度経済成長とは何だったのかを説明する。		・男女の違いに注目して、高度経済成長期を理解させる。
	次回の予告	現在とのつながりを提起して次回の予告とする。		・歴史と「今」を結びつける。

9 評価について（評価の中心点）

- ①関心・意欲：高度経済成長とそのなかでの家族の形態について興味を持つ。
- ②思考・判断：雇用形態の変化とともに家族のあり方が変わったことがわかる。
- ③資料活用の技能・評価：自分なりにノートを作り、グラフなどを読み取る。
- ④知識・理解：歴史的な変化が現在の制度とも結びついていることを理解する。

10 使用教科書・教材

『新日本史 A』実教出版社

図録

自作プリント

11 参考文献

荒川章二『日本の歴史16 豊かさへの渴望』（小学館、2009年）

鹿野政直『現代日本女性史』（有斐閣、2004年）